【梁紀十五】 起旃蒙赤奮若，盡柔兆攝提格，凡二年。

■梁、●西魏、**東魏**東魏、続国訳漢文大成 経子史部 第 9 卷 181p

高祖武皇帝十五大同年（乙丑，545年）

■**東魏**春，正月，丙申（32-16+1=17日），東魏は兼散騎常侍の**李獎**を遣わして來聘す。

東魏 **爾朱文暢の叛乱発覚、女功** 東魏の儀同の**爾朱文暢**は丞相司馬の**任胄**、都督の**鄭仲禮**等と謀り、正月望夜に打簇戲（魏の旧俗、正月十五夜を以て打簇戲を為し、能く中てる者は即時に帛を賞す）を觀るに因りて亂を作し、丞相の**歡**を殺し、**文暢**を奉じて主と為さんとす。事は洩れ、皆な死す。**文暢**は、**榮**之子也。其の姉の**敬宗**之后、及び**仲禮**の姉の**大車**は、皆な**歡**の妾と為り、寵有り、故に其の兄弟は皆な坐さず。

歡は上書して言わく、

「并州は、軍器の聚まる所、動もすれば女功を須つ、請う宮を置きて以て配没之口を處かん。又た吐谷渾（西魏を越えてその女を納れて挟み撃ちにするの意味）之女を納れて以て之を招懷せん。」

丁未（43-16+1=28日），晉陽宮を置く。二月，庚申（56-46+1=11日），**東魏**主は吐谷渾の可汗の從妹を納れて**容華**（前漢の内職の旧号、女官の名前）と為す。（9-182p）

● **西魏は突厥に使者派遣、突厥強大化** 魏の丞相の**泰**は酒泉の**胡安諾槃陀**を遣わして始めて使いを突厥に通じしむ。突厥は本は西方の小國なり、姓は**阿史那氏**、世々金山（現アルタイ山脈、トルコ語の金はアルタイ）之陽に居り、柔然の鐵工と為る。其の酋長の**土門**に至りて、始めて強大となり、頗る魏の西邊を侵す。**安諾槃陀**は至り、其の國人は皆な喜んで曰く、

「大國の使者は至る、吾が國は其れ將に興らんとす矣！」

東魏 **高歡は崔暹を重用** 三月，乙未（31-16+1=16日），東魏の丞相の**歡**は入りて鄴に朝し、百官は紫陌（鄴城の西北五里）に迎える。**歡**は**崔暹**の手を握り而して之を勞りて曰く、

「往日朝廷は豈に法官無からんや、肯えて糾劾するもの莫し。中尉は心を盡くし國に徇い、豪強を避けず、遂に遠邇をして肅清せ使む。鋒を衝き陣を陥とすは、大いに其の人有り。官に当たりて正色し、今始めて之を見る。富貴は乃ち中尉は自ら取れ、**高歡**父子は以て相い報いる無し。」

暹に良馬を賜う。**暹**は拜し、馬は驚き走り、**歡**は親ら之を擁し、授けるに轡を以てす。**東魏**主は華林園（鄴都にもあり）に宴し、**歡**をして朝廷の公直なる者を擇べ使め之に酒を勧める。**歡**は階を降りて跪きて曰く、
「唯だ**暹**一人のみ勧める可し、並せて請う臣が射る所の賜物千段を以て之に賜うべし。」

高澄は退き、**暹**に謂って曰く、

「我は尚ほ畏羨なり、何ぞ況んや餘人をや！」

然るに**暹**は中懷（心の中）頗る巧詐を挾む。初め、魏の高陽王の**斌**は庶妹の玉儀有り、其の家の齒とする所と為らず、**孫騰**の妓と為り、**騰**も又た之を棄てる。**高澄**は諸に塗に遇い、悦び而して之を納れ、遂に殊寵有り、**琅邪**公主に封ず。**澄**は**崔季舒**に謂って曰く、

「**崔暹**は必ず直諫を造さん、我も亦た以て之を待つ有り。」

暹が事を咨るに及び、**澄**は復た假するに顔色を以てせず。居ること三日、**暹**は刺（名刺の木の札）を懷にして之を前に墜とす。**澄**は問う、

「何ぞ此を用いるを為すや？」

暹は悚然として曰く、

「未だ公主に通じるを得ず。」

澄は大いに悦び、暹の臂を把り、入りて之を見る。季舒は人に語りて曰く、

「崔暹は常に吾が佞を忿る、大將軍の前に在りて、毎に叔父の殺す可きを言う。其の自ら作すに及び、乃ち吾に過ぎる。」

東魏夏，五月，甲辰（40-15+1=26日），東魏は大赦す。

●魏の王盟は卒す。（九年に魏は大尉となす）

●**宇文泰は蘇綽に大誥を作らす** 晋氏以來，文章は競いて浮華と為り，魏の丞相の泰は其の弊を革めんと欲す。六月，丁巳（53-44+1=10日），魏主は太廟に饗す。泰は大行台度支尚書、領著作の蘇綽に命じて《大誥》を作らしめ、群臣に宣示し、戒めるに政事を以てす。仍ち命じて、

「今より文章は皆な此の體に依れ。」（胡三省曰く、宇文泰は蘇綽をして周書に倣いて大誥を作らしむ。今その文は尚お在り。当時の文章をして皆此の體に依らしむとも、亦雅を崇び浮を黜くる所以に非ざるなりと）

■**陳霸先の意見で楊暕は李賁を撃破包圍** 上は交州刺史の楊暕を遣わして李賁を討たしめ、陳霸先を以て司馬と為す。定州（鬱林郡に梁が置く、廣西省蒼海道桂平県、現・広西壮族自治区貴港市桂平市）刺史の蕭勃に命じて（9-183p）暕に西江に會せしむ。勃は軍士の遠役を憚るを知り、因りて詭りて説きて暕を留める。暕は諸將を集めて計を問ひ、霸先は曰く、

「交趾の叛換するは、罪は宗室に由る（武林侯諡るに由る、前卷七年にあり）、遂に數州を溷亂（混亂）せしめ、逋誅（捕縛誅殺）すること累歲なり。定州（蕭勃）は目前に安を偷まんと欲し、大計を顧みず。節下は辭を奉じて罪を伐ち、當に死生は之を以てすべし。豈に逗留（とうど）（敵を恐れ進まぬ）して進まず、寇を長じ衆を沮む可けん也！」

遂に兵を勅して先發す。暕は霸先を以て前鋒と為す。交州に至り、賁は衆三萬を帥いて之を拒み、朱鳶（漢以來交趾郡に屬す県、安南、現・ベトナム）に敗れ、又た蘇歷江口に敗れる。賁は嘉寧城（呉の孫皓は建衡三年に交趾を分けて新興郡を立て、併せて嘉寧県を立てる。晋の武帝の太康三年に郡を更めて新昌という。フランス領東京州、現・ベトナムトンキン湾周辺）に奔り、諸軍は進みて之を圍む。勃は、曷（呉平侯曷は帝の從父弟）之子也。

東魏●**高歡は婁妃の進言で、柔然と婚姻** 魏は柔然の頭兵可汗と謀り、兵を連ねて東魏を伐ち、丞相の歡は之を患ひ、行台郎中の杜弼を遣わして柔然に使いし、世子の澄の為に求婚す。頭兵は曰く、

「高王は自ら娶れば則ち可なり。」

歡は猶豫して未だ決せず。婁妃（槽糠の妻）は曰く、

「國家の大計なり、願わくは疑う勿かれ也。」

世子の澄、尉景も亦た之を勸める。歡は乃ち鎮南將軍の慕容儼を遣わして之を聘せしめ、號して蠕蠕公主と曰う。秋，八月，歡は親ら下館（木井城、山西省冀寧道太原県、現・太原市晋源区）に迎える。公主は至り、婁妃は正室を避けて以て之を處く。歡は跪き而して拜謝し、妃は曰く、

「彼は將に之を覺らんとす、願わくは絶ちて顧みる勿かれ。」

頭兵は其の弟の秃突佳（続は秃突佳）をして來たりて女を送り、且つ報聘せしむ。仍ほ戒めて曰く、

「外孫を見るを待ち乃ち歸れ。」

公主は性嚴毅にして、終身肯えて華言せず。歡は嘗て病み、往くを得ず、禿突佳は怨み恚り、歡は疾を興して之に就く。

■冬、十月、己未（乙未×、55-42+1=14日）、詔して罪有る者に復た贖を入れるを聽す。（天監三年に贖罪科を除く、145卷）

■東魏東魏は中書舍人の尉瑾を遣わして來聘す。乙未（十月閏月なら31-12+1=20日）、東魏の丞相の歡は請いて邙山の俘囚（邙山の戰捷による捕虜）の桎梏（手枷足枷）を釋き、配するに民間の寡婦を以てす。

東魏十二月、東魏は侯景を以て司徒と為し、中書令の韓軌を司空と為す。戊子（24-11+1=14日）、孫騰を以て尚書事を録せしむ。

●魏は園丘を（長安の）城南に築く。

【賀琛の直言と蕭衍の反論】

■ [梁の賀琛の諫言] 散騎常侍の賀琛は四事を啟陳す。其の一に以為く、

「今北邊は稽服す（東魏が通じ和する事）、正に是れ生聚教議（伍子胥の、十年生聚し十年教訓す、の語を用いる）之時なり、而るに天下の戸口は減落し、關外（淮・汝・潼・泗・新に復す州郡の邊關の外に在る者）は彌々甚だし。郡は州之控總（制し総べる）に堪えず、縣は郡之衰削（削り減らす）に堪えず、更に相い呼擾し、惟だ征斂を事とす。民は命に堪えず、各々流移を務め、此れ豈に牧守之過ちに非ず歟！東境（三吳）の戸口の空虚なるは、皆な使命繁敷にして、幽を窮め遠を極め、皆な至らざる無きに由る、一使有る毎に、(9-184p) 屬する所は搔擾し、驚困の邑宰（続は守宰）は、則ち手を拱いて其の漁獵に聽せ、桀黠（悪賢い）の長吏は、又た之に因りて重ねて貪殘を為し、縦え廉平有るも、郡は猶ほ掣肘す。此くの如く、年ごとに復業之詔を降し、屢々蠲賦之恩（納税減免措置）を下すと雖も、而も民は其の居に反るを得ざる也。」

其の二に以為く、

「今天下の守宰の貪殘なる所以は、良く風俗の侈靡に由りて之を然ら使む也。今之燕喜（詩の魯頌に曰く、魯侯燕喜す、と飲食宴会して楽しむ）は、相い競いて豪を誇り、果を積みて丘陵の如く、餽を列べて綺繡に同じく、露台之産（百金をいう。15卷漢の文帝後七年にあり）は、一燕之資に過らず、而るに賓主之間は、裁に滿腹を取るのみ、未だ堂を下るに及ばず、已に臭腐に同じ。又た、妓を畜える之夫は、等秩有る無し、吏と為りて民を牧する者は、貲は巨億を致す、罷め歸る之日は、數年を支えず、率ね皆な燕飲之物、歌謠之具に盡く。費す所の事は丘山に等しく、歡を為すは止だに俄頃に在り、乃ち更に向に取る所之少なきを追恨す。復た翼を傳けて、其の搏噬を増すが如く（官を罷めて家職する人が復た出て官になるは、猶ほ奮飛する能わざる鳥に復たこれが羽翼をつけるが如し）、一に何ぞ悖れる哉！其の餘の淫侈、之を凡百に著し（時の人は凡そ百の為す所は皆淫侈を事とするをいう）、習いて以て俗と成し、日々に滋々甚だしきを見る。人をして廉白を守ら使めんと欲するも、安んぞ得る可けん邪！誠に宜しく嚴に禁制を為し、導くに節儉を以てし、浮華を糾奏し、其の耳目を變ずるべし。夫れ節を失う之嗟は、亦た民の自ら患える所、正に群に及ぶ能わざるを恥じる、故に勉強し而して之を為す。苟くも淳素を以て先と為せば、雕流之弊（衰退）を正すに足らん矣。」

其の三に以為く、

「陛下は四海を憂念し、勤勞を憚らず、百司に至るまで、事を奏せざるは莫し。但だ斗筲（わずかの分量を入れる容器）之人は、既に帷宸（玉座）に伏奏するを得、便ち詭りて競いて進むを求めんと欲し、國之大體は、心の明恕を存するを論じず（梁書賀琛傳には、「國の大體を論じず、一官に當り一職に居るはその紊亂を理め其の及ばざるを匡さしむるを貴び、心明恕に在れば事乃ち平章するを知らず」）に作る。資治通鑑は簡略化しすぎて大意が通じない。惟だ務めて毛を吹

き疵^{きず}を求め、肌^きを撃きて理を分け、深刻を以て能と為し、繩逐^{じゆじゆ}(過失を糾擧して驅逐する)を以て務めと為す。跡は奉公に似たりと雖も、事は更に其の威福を成し、罪を犯す者は多く、巧避すること滋々甚だしく、弊を長じ奸を増すは、實に此に由る。誠に願わくは其の公平之效を責め、其の讒慝^{しりぞ}之心を黜^{しりぞ}ければ、則ち下は安んじ上は謚^{しすか}に、徼幸之患い無からん矣。」

其の四に以為く、

「今天下は無事にして、而も猶ほ日々給するに暇あらず。宜しく事を省き、費を息むべし、事省かれれば則ち民は養われ、費息めば則ち財は聚まる。應に内に職掌を省き各々所部を検ずべし。凡そ京師の治(理事の所)、署(舎止の所)、邸(諸王の列第及び諸郡の朝宿の区)、肆(市列)及び國容(禮樂・車服・旗章)、戎備(軍備)、四方の屯(軍屯)、傳(駟伝)、邸治は、宜しく除くべき所有れば、之を除き、宜しく減ずべき所有れば、之を減ずべし。(9-185p) 興造(新たに事を興す)に急に非ざる者有り、徵求に緩くす可き者有れば、皆な宜しく停省し、以て費を息め民を休むべし。故に其の財を畜える者は、大いに之を用いる所以也。其の民を養う者は、大いに之を役する所以也。若し小事は財を害するに足らずと言え、則ち終年息まず矣。小役は民を妨げるに足らずを以て、則ち終年止まず矣。此くの如く、則ち以て富強を語り而して遠大を圖る可きこと難し矣。」

■ **[常に自重していると蕭衍の反論、]** 啟奏し、上は大いに怒り、主書(主書令史)を前に召し、敕書を口授し以て琛を責める。大いに指さして以為く、

「朕は天下を有つこと四十餘年、公車の讜言(善言・直言)は、日々に聽覽に關し、陳ずる所之事は、卿と異ならず、毎に控德(困苦、給するに暇あらず)に苦しみ、更に惛惑を増す。卿は宜しく自ら闡茸(不肖、劣る)と同じくすべからず、止だ名字を取り、之を行路に宣べ、『我は能く事を上る、朝廷之用いざるを恨む』と言う。何ぞ分別して顯言せざる。某刺史は横暴なり、某太守は貪殘なり、尚書、蘭台某人は奸猾なり、使者漁獵するは、並せて何の姓名ぞや? 取與する者は誰ぞや? 其の事を明言すれば、以て誅黜し、更に材良を擇ぶを得ん。又た、士民の飲食は差に過ぎ、若し嚴禁を加えれば、密房曲屋は、雲何して知る可きや? 倘し家家搜檢すれば、恐らくは益々苛擾を増さん。若し朝廷を指させば、我は此の事無し。昔之牲(王膳には六牲を用いる、牛馬羊豚犬鶏)牢は、久しく宰殺(帝は仏に事えて宰殺せず)せず、朝中の會同には、菜蔬而して已む。若し復た此を減じれば、必ず《蟋蟀(こおろぎ)》(詩の唐風に蟋蟀の篇有り、晉の僖公が儉約に過ぎて禮位に中らないを指す)之譏り有り。以て功德の事を為す者の若きは、皆な是れ園中之物、一瓜を變じて數十種と為し、一菜を治めて數十味と為す。變故多きを以て、何ぞ事を損せん！」

「我は公宴に非ざるよりは、國家之食を食わざること、多く年所を歴たり。乃ち官人に至るまで、亦た國家之食を食わず(其の公賦に出でざる。胡三省曰く、帝は東南を奄有す。凡そ其の食する所、其の身より以て六官に及ぶまで、仏當に由らず、神造に由らず、又西天竺國より來たらず。東南の民力に出でざる者有りや。惟だ公賦に出でず、遂に以て國家の食を食らわずと為す。誠に此の如くならば、則ち國家は果たして誰の國家ぞやと)。凡そ營造する所は、材官(材官將軍は少府に屬す)及び以て國匠(官は奉廩を給し以て國家の用を供する者。土木の工を掌る)に關せず、皆な雇藉に資り以て其の事を成す。勇怯同じからず、貪廉各々用あり、亦た朝廷之が為に翼を傳くるに非ず。卿は朝廷を以て悖れると為し、乃ち自ら之に甘んじ、當に悖れるに致す所以を思うべし! 卿は云う、『宜しく之を導くに節儉を以てすべし』、朕は房室を絶つこと三十餘年、居處に至りては一床之地に過ぎず、雕飾之物は宮に入らず。生を受けて飲酒せず、音聲を好まず、朝中の曲宴、未だ嘗て樂を奏せざる所以なり、此れ群賢之見る所也。朕は三更に出でて事を治め、事の多少に隨い、事少なければ午前に竟わるを得、事多ければ日昃^{かたむ}きて方に食す、日常は一食し、若しくは晝、若しくは夜。昔要(腰に通じる)腹は十圍に過ぎ、今之瘦削するは裁に二

尺餘りなり、舊帶は猶ほ存す、妄説を為すに非ず。(9-186p) 誰が為に之を為すや？物を救う故也。」

「卿は又た曰く、『百司事を奏せざる莫し、詭りて競いて進むを求む』と、今外人をして事を呈せ使めざれば、誰か其の任を屍どらん(最終責任という意味か)！専委(専ら委ねる)之人は、雲何ぞ得可きや？古人は云わく、『専聽は奸を生じ、獨任は亂を成す。』二世(秦の二世皇帝)之趙高(秦の宦官)に委ね、元后之王莽に付し、鹿を呼びて馬と為すは、又た法^{のつと}る可き歟？卿は云う、『毛を吹きて疵を求める』とは、復た是れ何人ぞや？『肌を撃きて理を分かつ』とは、復た是れ何の事や？治、署、邸、肆等は、何者をや宜しく除くべきや？何者をか宜しく減ずべきや？何處の興造か急に非ざるや？何處か徵求緩くする可きや？各々其の事を出だし、具^{つぶさ}に以て奏聞すべし！富國強兵之術は、民を息め役を省く之宜しきは、並せて宜しく具に列すべし！若し具に列せざれば、則ち是れ朝廷を欺罔するなり。重ねて奏するを聞くを佇^{たたず}み(続は倚、側なり、側は傾き待つ義。その側だて身を側だて席を側だつ壘の如し。倚聞とは聞かんことを待つ也。梁書賀琛傳は行に作る。解し易きに似たり)、當に復た省覽し、之を尚書に付し、海内に班下すべし、庶くは惟新之美は、復た今日に見ん。」
琛は但だ過ちを謝し而して已み、敢えて復た言わず。

■ 【蕭衍は節制すれども、真実の指摘を悪む】 上の人(続により補充)と為りは、孝(教×) 慈悲儉(子が親に仕え親が子を慈しみ、慎み深い)、博學にして文を能くし、陰陽、卜筮、騎射、聲律、草隸、圍棋、精妙ならざるは無し。政務に勤め、冬月は四更(夜を五更に分け、更毎に五點に至りて竟る) 竟れば、即ち起きて事を視る、筆を執りて寒に觸れ、手は為に皴裂(ひび割れ)す。天監中より釋氏の法を用い、長きに齋り魚肉を斷ち、日に止だ一食し、惟だ菜羹、糲飯(玄米)に而して已む、或は事繁きに遇い、日の中を移れば則ち口を嗽ぎて以て過ぐ(日を渡る)。身は布衣を衣、木綿の阜帳(黒色の帳)、一冠三載、一衾二年、後宮の貴妃以下、衣は地を曳かず。性は飲酒せず、宗廟祭祀、大饗宴及び諸々の法事(仏に奉じ梵唄を為す)に非ざれば、未だ嘗て樂(音楽)を作さず。暗室に居ると雖も、恆に衣冠を理め、小坐(宮中の便座)にも盛暑、未だ嘗て褰袒(はだける)せず。内豎の小臣に對するも、大賓に遇うが如し。然るに士人を優假すること太だ過ぎ、牧守は多く百姓を浸漁し、使者は郡縣を干擾す。又た好みて小人を親任し、頗る苛察に傷(復×)わる。多く塔廟を造り、公私費損す。江南は久しく安じ、風俗は奢靡なり。故に琛の啟は之に及ぶ。上は其の實に觸るるを惡み、故に怒る。

■ 【蕭衍は國滅びんとするを知らず】 臣光は曰く、

「梁の高祖之終わらざる也、宜なる哉！夫れ人主の聽納之失は、叢脞(細碎にして大略無き也)に在り。人臣の獻替之病は、煩碎に在り。是を以て明主は要道を守り以て萬機之本を御し、忠臣は大體を陳べ以て君心之非を格す。故に身勞せず而して功を收めること遠く、言は至って約に而して益を為すこと大也。夫の賀琛之諫を觀るに亦た未だ切直に至らず、而るに高祖は已に赫然として震怒す、其の短なる所を護り、其の長ざる所を矜る。、貪暴之主名を詰り、勞費之條目を問い、困しむるに對え難きの之狀を以てし、責めるに必ず窮する之辭を以てす。自ら蔬食之儉を以て盛徳と為し、日昃之勤を至治と為し、君道は已に備わり、復た加える可き無く、群臣の箴規は、舉げて聽くに足らず。(9-187p) 此くの如く、則ち自餘の切直之言は琛に過ぎる者は、誰か敢えて進まん哉！是に由りて奸佞(朱异・周石珍の輩)前に居り而るに見ず、大謀顛錯(この後、侯景を受入れ、また東魏と和するをいう)し而るに知らず、名辱しめられ身危く、邦を覆し祀を絶ち、千古の閔笑する所と為る、豈に哀しからず哉！

■ 【蕭衍の政治は犯罪者を横行させる寛容さ】 上は敦く文雅を尚び、刑法を疏簡し、公卿大臣より、鹹な鞠獄を以て意と為さず。奸吏は權を招き法を弄び、貨賂は市を成し、枉濫する者は多し。大率二歳の刑已上は歲に五千人に至る。徙して居作する者は五任(任は人の特技。木・金・皮・色・埴)を具え、其の任無き者は

升械（桎梏の屬）を著ける。若し疾病すれば、**權**に之を解き、是の後囚徒は或は優（官吏に賄賂を贈る者は權に械を解く）、劇（賄賂を贈れず疾病でも解けず苦劇する者もある）有り。時に王侯の子弟は、多く驕淫にして不法なり。上は年老い、萬幾を厭い。又た専ら佛戒に精だし、重罪を斷ずる毎に、則ち終日憚らず。或は反逆を謀りて、事覺われ、亦た泣き而して之を宥す（臨賀王正徳父子など）。是に由りて王侯は益々横になり、或は白晝都街に殺人し、或は暮夜に剽掠を公行し、罪有りて亡命する者は、王家に匿れば、有司は敢えて搜捕せず。上は深く其の弊を知る、而も慈愛に溺れ、禁じる能わざる也。

● **〔瓜州の鄧彦の叛乱の鎮圧〕** 魏の東陽王の**榮**は瓜州（五代志に敦煌郡に旧瓜州を置くと。甘肅省安肅道安西県、現・酒泉市瓜州県）刺史と為り、其の婿の**鄧彦**と偕に行く。**榮**は卒し、瓜州の首望（各州の大姓、一州の望族の主）は**榮**の子の**康**を表して刺史と為し、**彦**は**康**を殺し而して其の位を奪う。魏は討つ能わず、因りて**彦**を以て刺史と為し、屢々征して至らず、又た南に吐谷渾（敦煌の南）に通じる。丞相の**泰**は道遠く衆を動かすに難きを以て、計を以て之を取らんと欲し、給事黃門侍郎の**申徽**を以て河西大使と為し、密に**彦**を圖ら令む。**徽**は五十騎を以て行き、既に至り、賓館に止まる。**彦**は**徽**が單使（少人数、副使がない）なるを見、以て疑いを為さず。**徽**は人を遣わして**彦**に歸朝を勧めしめ、**彦**は従わず。**徽**は又た其の留計を賛成せしめ、**彦**は之を信じ、遂に來たりて館に至る。**徽**は先ず州の主簿の敦煌の**令狐整**（瓜州の望）等と密に謀り、**彦**を坐に執り、責め而して之を縛す。因りて詔を宣して吏民を慰諭し、且つ云わく、
「大軍は續いで至る」（鄧彦の与党は大軍恐れを為す）
と、城中は敢えて動く者無く、遂に**彦**を長安に送る。**泰**は**徽**を以て都官尚書と為す。（9-188p）

高祖武皇帝十五中大同元年（丙寅，546年）

■ **春，正月**，癸丑（49-40+1=10日），**楊暉**等は嘉寧城に克ち、**李賁**は新昌の獠中に奔り、諸軍は江口（蘇歷江口）に屯す。

● **〔涼州混乱〕 二月**，魏は義州（東西の義は争う）刺史の**史寧**を以て涼州刺史と為す。前刺史の**宇文仲和**は州に據り、代を受けず、瓜州の民の**張保**は刺史の**成慶**を殺し以て之に應じ、晉昌（郡、甘肅省安肅道安西県の東、現・酒泉市瓜州県）の民の**呂興**は太守の**郭肆**を殺し、郡を以て**保**に應ず。丞相の**泰**は太子の太保の**獨孤信**、開府儀同三司の**怡峰**を遣わして**史寧**と之を討たしむ。

■ **三月**，乙巳（41-39+1=3日），大赦す。

■ **〔同泰寺の再建ならず〕** 庚戌（46-39+1=8日），上は同泰寺に幸し、遂に寺省（便省あり）に停まり、《三慧經》を講す。**夏，四月**，丙戌（22-9+1=14日），講を解き、大赦し、改元す。是の夜、同泰寺の浮圖に災あり、上は曰く、

「此れ魔也、宜しく廣く法事を為すべし。」

群臣は皆な善しと稱す。乃ち下詔して曰く、

「道高ければ魔盛んなり、行善なれば鄣は生ず。當に茲の土木を窮め、往日に倍增すべし。」

遂に十二層の浮圖を起す。將に成らんとし、**侯景**の亂に値いて而して止む。

【涼州の混乱続く】

● **〔宇文仲和は擒となる〕** 魏の**史寧**は涼州の吏民を曉諭し、率ね皆な歸附す、獨の**宇文仲和**は城に據りて

下らず。**五月**、**獨孤信**は諸將をして夜其の東北を攻め使め、自ら壯士を帥いて其の西南を襲う。遲明に、之に克ち、遂に**仲和**を擒とす。

● **[張保は内心令狐整を恐れる]** 初め、**張保**は州の主簿の**令狐整**を殺さんと欲し、其の人望あるを以て、衆心を失うを恐れ、外には相い敬うと雖も、内には甚だ之を忌む。**整**は陽りて親附する為し、因りて人をして**保**を説か使めて曰く、

「今東軍（獨孤信）は漸く涼州に逼り、彼の勢いは孤危にして、恐らくは敵する能わず、宜しく急に精銳を分けて以て之を救うべし。然れども成敗は將領に在り、**令狐延保**（整の字）は、文武を兼資し、將兵をして以て往か使めば、濟らざる蔑からん矣。」

保は之に従う。

● **[令狐整は張保を追放]** **整**は行きて玉門に及び、豪傑を召して**保**の罪狀を述べ、馳せ還りて之を襲う。先ず晉昌に克ち、**呂興**を斬る。進みて瓜州を撃ち、州人は素より**整**に信服し、皆な**保**を棄てて來降し、**保**は吐谷渾に奔る。

● **[令狐整は宇文泰に重用される]** 衆は議して**整**を推して刺史と為し、**整**は曰く、

「吾が屬は**張保**が逆亂し、闔州之人が俱に不義に陥らんとするを恐れるを以て、故に相い與に討ちて之を誅す。今復た推される、是れ尤に倣う（左傳に曰く、尤めてこれに倣う、罪又これよりも甚だし）也。」

乃ち魏の遣わして波斯に使いせしむる所の者の**張道義**を推して州事を行わしめ、具に狀を以て聞す。丞相の**泰**は**申徽**を以て瓜州刺史と為し、**整**を召して壽昌（郡、陝西省漢中道石泉県、現・安康市石泉県）太守と為し、襄武男に封じる。**整**は宗族郷里三千餘人を帥いて入朝し、**泰**の征討に従いて、驃騎大將軍、開府儀同三司に累遷し、侍中を加えらる。

東魏六月，庚子（36-8+1=29日），東魏は司徒の**侯景**を以て河南大將軍、大行台と為す。（9-189p）

■ **東魏**秋，七月，壬寅（38-38+1=1日），東魏は散騎常侍の**元廓**を遣わして來聘す。

■ **[梁の貨幣政策の失敗、物価高騰]** 甲子（60-38+1=23日），詔す、

「犯罪して大逆に非ざれば、父母、祖父母は坐せず。」

是より先、江東は唯だ建康及び三吳、荆、郢、江、湘、梁、益のみ錢を用い、其餘の州郡は雜えるに穀帛を以てし、交、廣は専ら金銀を以て貨と為す。上は自ら五銖及び女錢を鑄（杜侑曰く、梁の武帝は錢を鑄るに肉孔周郭あり、文を五銖と曰い重さ二銖三銖三銖、其の百文は則ち重さ一斤二兩。又別に其の肉郭を除きたるを鑄、これを公式女錢と謂い、徑一寸、文を五銖と曰い重さ新鑄の如し。五銖の二錢並びて行う。其の末に及びては又兩柱錢有り）と、二品は並び行い、諸々の古錢を禁じる。普通中、更に鐵錢を鑄る。是に由り民の私鑄する者多く、物價は騰踊し、交易する者は車を以て錢を載せ、復た計數せざるに至る。又た破嶺（破崗、秦の始皇帝が穿つ、現・鎮江市句容市）より以東は、八十を百と為し、名づけて曰う「東錢」と。江、郢より以上は、七十を百と為し、名づけて曰う「西錢」と。建康は九十を以て百と為し、名づけて曰く、「長錢」と。丙寅（2+60-38+1=25日），詔して曰く、

「朝四暮三、衆狙は皆な喜ぶ（莊子に曰く、狙公は茅を賦つに朝三暮四と曰えば、衆狙皆怒る。朝四暮三と曰えば衆狙皆喜ぶと）、名實は未だ虧けざるに而して喜怒用を為す。頃聞く外間多く九陌錢を用いると、陌減じれば則ち物は貴し、陌足るときは則ち物は賤し、物に貴賤有るに非ず、乃ち心に顛倒有り。遠方に至りては、日々更に滋々甚だし、徒らに王制を亂るのみ、民の財を益す無し。今よりは通じて足陌錢を用いる可し！令書行われて後、百日を期と為す、若し猶ほ犯す有れば、男子は謫運（謫を以て發して転運せしむ）し、女子は質作（その

身を質として居作せしむ) すること, 並びに同じく三年せん。」

詔下り而して人は従わず, 錢陌は益々少なし。季年に至りて, 遂に三十五を以て百と為すと雲う。

■ **[太子綱は諸王の半独立に不満]** 上の年は高く, 諸子の心は相い下らず, 互いに相い猜忌す(続は欠如)。邵陵王の**綸**は丹楊尹と為り, 湘東王の**繹**は江州に在り, 武陵王の**紀**は益州に在り, 皆な權は人主に倅し。太子の**綱**は之を惡み, 常に精兵を選び以て東宮を衛る。**八月**, **綸**を以て南徐州刺史と為す。

東魏 東魏の丞相の**歡**は鄴に如く。**高澄**は洛陽の《石經》五十二碑(57 卷漢の靈帝嘉平四年にあり)を鄴に遷す。

● **東魏** **[再度玉壁対決]** 魏は并州(西魏は并州刺史を置き, 玉壁に僑治す) 刺史の**王思政**を徙して荊州刺史と為し, 之をして諸將の代わりて玉壁を鎮す可き者を擧げ使む。**思政**は晉州(東魏に属し, 韋孝寬は遙かに刺史を領するのみ) 刺史の**韋孝寬**を擧げ, 丞相の**泰**は之に従う。東魏の丞相の**歡**は悉く山東之衆を擧げ, 將に魏を伐たんとす。癸巳(29-7+1=23日), 鄴より兵に晉陽に會す。**九月**, 玉壁に至り, 之を圍む。以て西師を挑み, 西師は出でず。

■ **[陳霸先は李賁を撃破]** **李賁**は復た衆二萬を帥いて獠中より出でて典澈湖(當に新昌郡の界にあるべし)に屯し, 大いに船艦を造り, 湖中に充塞す。衆軍は之を憚り, 湖口に頓し, 敢えて進まず。**陳霸先**は諸將に謂って曰く、

「我が師は已に老い(楊暉等は去年六月に師を出してほとんど一年), 將士は疲勞す。且つ孤軍にして無援なり, 人の心腹に入る, 若し一戦して捷たざれば, 豈に生全を望まんや! (9-190p) 今其の屢々奔り, 人情は未だ固まざるに藉れば, 夷、獠は烏合にして, 摧殄(摧折消滅)を為し易し。正に當に共に百死に出で, 力を決して之を取るべし, 故無くして停留すれば, 時事は去らん矣!」

諸將は皆な默然として應える莫し(諸將は戦いを好まず)。是の夜, 江水は暴にわかに起こること七丈, 湖中に注ぎ。

霸先は所部の兵を勸し流れに乗りて先ず進み, 衆軍は鼓噪して俱に前む。**賁**の衆は大いに潰え, 竄のがれて屈獠洞中に入る。

■ **[察兄弟は會稽に実力を蓄える]** **冬, 十月**, 乙亥(11-6+1=6日), 前東揚州刺史の岳陽王の**察**を以て雍州刺史と為す。上は**察**(続は督)兄弟(155 卷中大通三年にあり)を捨てて而して太子の**綱**を立て, 内に常に之を愧じ, 寵は諸子につぐぐ(帝は察の才器以て自立するに足るを知る)。會稽は人物殷阜(繁盛)なるを以て, 故に**察**兄弟を用いて送たがいに東揚州と為り以て其の心を慰む。**察**兄弟も亦た内に不平を懷く。**察**は上の衰老にして, 朝に秕政(悪しき政事)多きを以て, 遂に貨財を蓄聚し, 節を折りて士に下り, 勇敢を招募し, 左右は數千人に至る。以えらく, 襄陽は形勝之地にして, 梁の業の基づく所(蕭衍は襄陽より兵を起こす), 亂に遇えば以て大功を圖る可し。乃ち己に克ちて政を為し, 士民を撫循し, 數々恩惠を施し, 規諫を延納し, 所部は治を稱す。

【玉壁の攻防戦】

東魏 ● **[玉壁の総力戦、土山地道]** 東魏の丞相の**歡**は玉壁を攻め, 晝夜息まず, 魏の**韋孝寬**は機に隨いて之を拒む。城中に水無く, 汾に汲み, **歡**は汾を移さ使め(汾水の上流を決して城に流さず), 一夕に而して畢る。**歡**は城南に於いて土山を起し, 之に乗りて以て入らんと欲す。城上は先ず二樓有り, **孝寬**は木を縛して之を接し, 常に土山より高から令め以て之を御ぐ。**歡**は之を告げ使めて曰く、

「爾が樓を縛して天に至ると雖も, 我は當に地を穿ちて爾を取らん。」

乃ち地を鑿ちて十道を為り, 又た術士の**李業興**の「孤虚法」(日辰方位の吉凶を論ずる法、戦陳の法は孤を避け虚を撃

つ)を用いて、聚まりて其の北を攻める。北は、天險也。**孝寛**は長塹を掘り、其の地道を邀え、戦士を選びて塹上に屯せしむ。穿ちて塹に至る毎に、戦士は輒ち擒として之を殺す。又た塹外に於いて柴を積み火を貯え、敵の地道の内に在る者有れば、柴を塞ぎて火を投げ、皮排(革囊の火を吹く物、鞴)を以て之を吹き、一鼓し皆な焦爛す(送風機の様な役割)。敵は攻車を以て城を撞き、車之及ぶ所、摧毁(粉碎)せざるは莫く、能く御ぐ者無し。**孝寛**は布を縫いて幔と為し、其の向う所に隨いて之を張り、布は既に空に懸かり、車は壞る能わず。敵も又た松、麻(松薪・麻骨は可燃性)を竿に縛し、油を灌ぎて火を加えて布を焼き、並せて樓(続は城)を焚かんと欲す。**孝寛**は長鉤(竿は槍の如く両側に曲刀あり)を作り、其の刃を利(銳利)くし、火竿將に至らんとし、鉤を以て遙に之を割き、(9-191p)松、麻は俱に落つ。敵は又た城の四面に於いて地を穿ちて二十道を為り、其の中に樑柱を施し、火を縦ちて之を焼く。柱は折れ、城は崩れる。**孝寛**は崩れる處に隨(続は於)いて木柵を豎て以て之を扞ぎ、敵は入るを得ず。城外は攻撃之術を盡くし、而るに城中の守禦は餘り有り。**孝寛**も又た其の土山を奪據す。**歡**は之を如何する無く、乃ち倉曹參軍の**祖斑**をして之に説か使めて曰く、

「君は獨り孤城を守り、而るに西方に救い無し、恐らくは終に全くす能わず、何ぞ降らざる也？」

孝寛は報じて曰く、

「我が城池は嚴固にして、兵食は餘り有り。攻める者は自ら勞し、守る者は常に逸す、豈に旬朔(十日と月を越える)之間に已に救援を須つ有らんや!適に憂うるは、爾の衆に返らざる之危うき有るや。**孝寛**は關西の男子なり、必ず降將軍と為らざる也！」

斑は復た城中の人に謂って曰く、

「**韋**城主は彼の榮祿を受け、或は復た爾す可し。自外の軍民は、何ぞ相い隨いて湯火の中に入るを事とせん！」

乃ち募格(懸賞金を付けて人を募る)を城中に射、云わく、

「能く城主を斬りて降る者は、太尉に拜し、開國郡公に封じ、帛萬匹を賞せん。」

孝寛は手づから背に題書し、城外に返射して云わく、

「能く**高歡**を斬る者は此に准じん。」

斑は、瑩(150 卷普通六年にあり)之子也。東魏は苦攻すること凡そ五十日、士卒の戦い及び病死する者は七萬人、共に一塚を為る。**歡**の智力は皆な困しみ、因り而して疾を發す。星有り**歡**の營中に墜ち、士卒は驚懼す。**十一月**、庚子(36-36+1=1日)、圍みを解いて去る。

東魏●[**侯景**は**楊檟**を恐れ撤退]是より先、**歡**は別に**侯景**をして兵を將いて齊子嶺(河南省河北道濟源県、現・濟源市)に趣か使め、魏の建州刺史の**楊檟**は車廂(車箱×、山西省河東道垣曲県の界、現・運城市垣曲県)に鎮し、其の邵郡に寇せんと恐れ、騎を帥いて之を御ぐ。**景**は**檟**の至るを聞き、木を斫り路六十餘里を斷ち、猶ほ驚き而して安んぜず、遂に河陽に還る。庚戌(46-36+1=11日)、**歡**は**段韶**をして太原公の**洋**に従いて鄴に鎮せ使む。辛亥(47-36+1=12日)、世子の**澄**を征して晉陽に會せしむ。

●魏は**韋孝寛**を以て驃騎大將軍、開府儀同三司と為し、進爵して建忠公とす。時の人は**王思政**を以て人を知ると為す。

東魏●[射殺の噂で、**高歡**は無理に坐して政務]**十二月**、己卯(15-5+1=11日)、**歡**は功無きを以て、表して都督中外諸軍を解き、**東魏**主は之を許す。**歡**之玉壁より歸る也、軍中は訛言す、

「**韋孝寛**は定功弩を以て丞相を射殺す」

魏人は之を聞き、因りて下令して曰く、

「勁弩一たび發し、凶身自ら墜ちぬ。」

歡は之を聞き、勉めて坐して諸貴を見、**斛律金**（敕勒部の人）をして作《敕勒歌》を作ら使む、歡は自ら之に和し、哀感して流涕す。

●【宇文泰は蘇綽の死に慟哭】魏の大行台度支尚書、司農卿の**蘇綽**は、性は忠儉にして、常に喪亂未だ平らざるを以て己が任と為し、賢を薦し能を抜き（綽は欠如）、庶政を紀綱す。丞相の**泰**は心を推して之に任じ、人は能く問する莫し。或は出遊すれば、常に預め空紙に署して以て**綽**に授く。須く處分有れば、隨事施行し、還るに及び、啟知し而して已む。**綽**は常に謂う、

「國を為す之道は、當に人を愛すること慈父の如し、人に訓えること嚴師の如し。」

公卿と論議する毎に、晝より夜に達し、事は鉅細無く、諸を掌に指すが若し、勞を積み疾を成し而して卒す。**泰**は深く之を痛惜し、（9-192p）公卿に謂って曰く、

「蘇尚書は平生廉讓にして、吾は其の素志を全くせんと欲す、恐らくは悠悠之徒は未だ達せざる所有り。如し厚く贈諡を加えれば、又た宿昔相い知る之心に乖かん。何為れぞ而して可なるや？」

尚書令史の**麻瑤**は次を越えて進みて曰く、

「儉約は、其の美を彰す所以也。」

泰は之に従う。武功（蘇綽の出身地）に歸葬し、載せるに布車一乘を以てす、**泰**は群公と歩いて送り同州の郭外に出る。**泰**は車後に於いて酒を酌いで言つて曰く、

「尚書は平生事を為し、妻子兄弟は知らざる所の者も、吾は皆な之を知る。唯だ爾は吾が心を知り、吾は爾の志を知る、方に共に天下を定めんと欲す、遽に吾を捨てて去る、奈何せん！」

因りて聲を擧げて慟哭し、^{さかづき} 卮の手より落ちるを覺らず。

【高歡の病と侯景の叛意】

東魏【高歡は侯景に十萬の兵を河南に杖任】東魏の司徒、河南大將軍、大行台の**侯景**は、右足は偏短にして、弓馬は其の長に非ず、而れども謀算多し。諸將の**高敖曹**、**彭樂**等は皆な勇は一時に冠たり、**景**は常に之を輕んじ、曰く、

「此の屬は皆な豕突の如し、勢いは何の至る所ぞや！」

景は嘗て丞相の**歡**に言う、

「願わくは兵三萬を得れば、天下に横行せん、要^{かなら}ず須く江を濟りて**蕭衍**老公を縛取し、以て太平寺主と為すべし。」

歡は兵十萬を將して、河南を專制せ使め、杖任すること己之半體の若し。

東魏【侯景は高澄と反目、自立を模索】**景**は素より**高澄**を輕んじ、嘗て**司馬子如**に謂つて曰く、

「高王在れば、吾は敢えて異有らず。王没すれば、吾は鮮卑の小兒と事を共にする能わず！」

子如は其の口を掩う。**歡**の疾篤きに及び、**澄**は詐りて**歡**の書を為りて以て**景**を召す。是より先、**景**は**歡**と約して曰く、

「今兵を握りて遠きに在り、人は詐りを為し易く、賜わる所の書は皆な請う微點を加えん。」

歡は之に従う。**景**は書を得て點無し、辭して至らず。又た**歡**の疾篤きを聞き、其の行台郎の**穎川**の**王偉**の計を用い、遂に兵を擁して自ら固める。

東魏【高歡は高澄に死後の武将の動向を予想】**歡**は**澄**に謂つて曰く、

「我は病と雖も、汝の面は更に餘の憂有るは、何ぞ也？」

澄は未だ對えるに及ばず、歡は曰く、

「豈に侯景の叛を憂えるに非ざる邪？」

對えて曰く、

「然り。」

歡は曰く、

「景は河南を專制すること、十四年（東魏の天平元年に荊州となり、河南を得るまで十三年、この言は翌年にあるべし）矣、常に飛揚跋扈之志有り、顧みるに我は能く畜養す、汝の能く駕御する所に非ざる也。今四方は未だ定まらず、遽に哀（喪）を發する勿かれ。庫狄干は鮮卑の老公、斛律金は敕勒の老公、並びて性は適直（健固正直）なり、終に汝に負かず。可朱渾道元（東魏に降るは157卷大同元年にあり）、劉豐生（大同二年に東魏に奔る）は、遠來して我に投ず、必ず異心無し。潘相樂は本は道人と作り、心は和厚なり、汝の兄弟は當に其の力を得るべし。韓軌は少しく驕^{おごるか}なり、宜しく之を寛借すべし。彭樂は心腹得難し、宜しく之を防護すべし。侯景に敵するに堪える者は、唯だ慕容紹宗有るのみ、(9-193p) 我は故に之を貴ばず、留めて以て汝に遺す（澄をして厚く官爵するを以て紹宗の心を結ばせる）。」

又た曰く、

「段孝先（段韶の字）は忠亮にして仁厚、智勇兼備し、親戚之中、唯だ此の子有るのみ、軍旅の大事は、宜しく共に之を籌^{はか}るべし。」

又た曰く、

「邙山之戦い（前卷大同九年）には、吾は陳元康之言を用いず、患いを留めて汝に遺す、死して瞑目せず！」

相樂は、廣寧の人也。

令和5年3月1日 翻訳開始 6959文字

令和5年3月8日 翻訳終了 15065文字